尾台榕堂　医案⑥

浅井正馬の妻。診を請う。胸膈痞満し、時に宿飲を吐し、脇腹拘攣、小腹微満、肌膚青白にして色沢無く、頭髪栄えず、唇舌乾燥し、声音揚がらず、心下、小腹時々痛みを作し、形容半百の人のごとし。曰く、「妾、天癸始めて下りしより、遅蚤常無く、或いは多く或いは少なく、或いは来り或いは来らず、已に二十余年を経たり。薬餌・鍼艾、年に虚日無きも、尚病患を脱する能わず。又未だ一子を育むを得ず、沈憂、積念転じて復た病を増す。幸くば憐憫を垂れよ」と。

余診了りて、之に謂いて曰く、「疾病は毒薬・鍼焫に非ざれば、逐除する能わず。精気は穀肉・菓菜に非ざれば、滋養する能わず。若し徒らに平淡・泛雑の薬を服して、飲食に浪りに禁忌を立つれば、是れ特だに疾病除くを得ざるのみならず、精気も亦た充暢する能わず。所以に宿屙脱せず、日に惟悴に就くなり。今、勉めて瞑眩の薬を服し、飲食は嗜好に従い、節を以て之を進めば、則ち痼疾除くべく、壮健期すべし。年已に四十に近し。子を生むがごときは、必すべからざるなり」と。

乃ち大柴胡加芒消湯を与うること数十日、腹痛して瀉する者、日に二、三行。胸腹和解し、嘔吐止みて、食飲稍々進む。当帰建中湯に転ず。又日に大黄蜜虫丸一銭を用う。章門・腰眼・八髎穴に灸すること、毎月十余日、食量日に加わり、肌膚・唇舌に滋潤を生じ、経水時を以て下る。尚前法に依ること又数月。幾く無く、経水断ちて、悪阻の状を見す。因りて半夏厚朴湯を与う。嘔吐漸く止み、飲食随いて進み、気体常人のごとし。翌年の夏に至りて一男子を娩ず。時に三十九歳なり。